

冬至儀式

I O S 儀式魔術文書 S O 4



THE OFFICIAL ORGAN
OF
I O S

PUBLICATION IN CLASS D
IMPRIMATUR : M FRATER I O S

THE WINTER SOLSTICE CEREMONY FOR GROUP WORKING
I O S RITUAL MAGIC WORKING

目 次

第 1 章	解 説
1	司官の配置
2	儀式場の準備
第 2 章	開 式
	L B R P / L B R H
	浄化 / 聖別
	四門の開放
	竜の周行
	宇宙の主の讃歌
第 3 章	冬至祝祭
	諸神の召喚
	宇宙の主の讃歌
	神話探訪《二つの木》
	聖 餐
	宇宙の主の讃歌
第 4 章	閉 式
	浄化 / 聖別
	諸神への賛辞
	竜の逆周行
	宇宙の主の讃歌
	四門の閉鎖
	L B R P / L B R H

All rights reserved. Copyright 1994 by I O S

No part of this text may be reproduced or transmitted in any form or by any means, electronic, mechanical or spiritual, including photocopying, recording, psychometry or by any information storage and retrieval system, without permission in writing from the Order.

第1章 解 説

本儀式は、小規模な団内グループ(ロッジ単位程度)が比較的簡易な準備で行えることを前提に作成した。従って、《黄金の夜明け》団などで執拗なまでに追求された儀式のシンメトリーや細部の精密さに欠ける部分があるかもしれない。しかし、本儀式においては、豊潤な虚飾より実践的簡潔さを、正確で冗長な記述より、瞬間の真実と実効性を追求した。

《冬至点》は、北半球では日照時間のカーブが最小を記録する日である。つまり、この日は太陽の恵みが最も少ない。最も寒い日ではないが、最も暗い日であると言える。同時に、この日以降、日照時間は上昇カーブに転じる。つまり、光が増大し始める。これを総じて、冬至は「死のなかの生」、「暗き闇の底で光を夢見るとき」であるとされる。

本儀式は冬至点の前後48時間以内に実施すること。本儀式では、立体天球の北極を取り巻く《大いなる竜》の力を召喚する。従って儀式の最初と最後にハイエロファントは、自己の責任で小五芒星及び小六芒星の追儼儀式を行わねばならない。竜を伴う関係上、五芒星儀礼は《エジプト式文》を行う必要がある。六芒星儀礼は『スター・サファイヤ』のラテン語版を記述した。四方位を竜の開門で開き、「生まれなき者」の儀式により《三重に偉大なる者》、混沌の破壊者としての《驚の神》を召喚する。

1 司官の配置

本儀式に必要な最低の人数は4人である。(ハイエロファントがヘゲモンを兼ね、儀典司官がない場合。)通常は8名の司官を選定する。司官以外の参加者は、何人でも可能であるが、グループの大きさに応じて適当な場所を選ぶ必要がある。

司官、参加者ともに可能ならば、法衣を纏う。通常は、位階の指定色、《黄金の夜明け》では第1回は黒、第2回は白であるが、特殊な神殿の場合はこの限りではない。

司官8名の体現する象徴、神、魔法武器、役割などは以下のとおりである。

《ハイエロファント = 壺 = ラー・ホール・クイト神》
魔術剣と鈴を携え、神殿を初期化し、儀式全体を執行する。

《ヘゲモン = 風 = ネフティス女神》
短剣を携え、東の場を設定し、イシス神に神問いを行う。

《ダドウコス = 火 = セト・テュフォーン神》
杖を携え、神殿を火で聖別し、南の場を設定する。

《ハイエレイア = 水 = イシス女神》
杯を携え、神殿を水で浄化し、西の場を設定し、イシス神の媒体となる。

《ストリストリア = 地 = オシリス神》
アंकを携え、北の場を設定する。

《儀典司官 = トート神》
儀式文書を携え、儀式の節目に発言し、不測の事態に当たっては司官及び参加者を誘導する。その役目は儀典官(Protocolor)、後見人(Prompter)、先唱者(Precentor)である。

《門番 = アヌビス神》
黒杖を携え、神殿の門を守る。境界の右の守護者

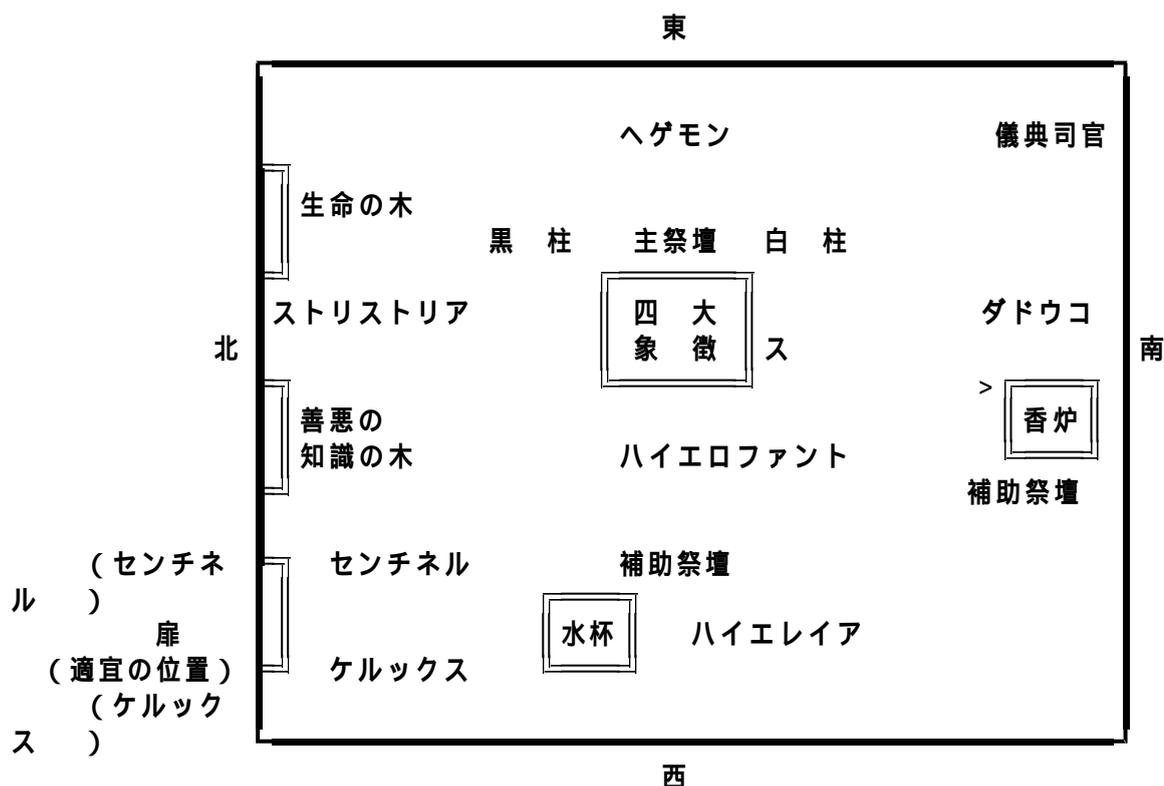
《警衛 = セベク神》
剣または槍を携え、神殿の門を通過する者を脅かす。境界の左の守護者

2 儀式場の準備

完全な形の神殿を準備することは不可能である。地上の神殿は、アストラル神殿を誘引するための道具立てなので、要点を押さえる形で器材を配置する。次に述べるのは、魔術の神殿において通常配置される主要な器材であるが、総てを揃える必要はない。グループで準備できる範囲で、儀式の場所に適合した器材を準備すれば良い。それが無理な場合は、ただの部屋を何の粉飾もせずにいる場合もある。

神殿は薄暗くしておく。儀典司官は書物を読むために、必要な携帯灯火を用意しておく。

《神殿の配置》



《祭壇》

理想的には、二重立方祭壇を準備する。《黄金の夜明け》式の黒、セフィロト配色、その他の神殿固有の色調等を用いる。普通の机を用いる場合は祭壇覆いをかけて代用する。祭壇は部屋の中央に据える。本儀式においては、南と西に補助祭壇を設けて、神殿を清める香炉に水杯（ゴブレット）を置く。香炉は、ハイエロファントがLBRP及びLBRHを開始する以前に点火しておくが、儀式の最中に燃え尽きてそのままでも良い。水杯には十分な塩水を入れておく。

《柱》

ヤキンとボアズの二柱を準備する。できない場合は、想像力で補う。神殿の正面を東とし、東の壁のさらに彼方に、右に白く輝く象牙の柱、左に黒光りする黒檀の柱を視覚化する。

《椅子》

四方位の壁の中央に椅子を置き、四方司官の座とする。ハイエロファントと儀典官には椅子はない。参加者の椅子は適宜配置する。部屋の構造が四方位と対応していないときは、儀式的な東方の壁を最初に定めて、そこから東西南北を規定する。四角形ではない部屋を用いる場合は、その構造に応じて配置する。

《四大旗》

該当する方位の壁に下げる。『エゼキエル書』に現れるケルビムを表象する旗、絵画、彫像、或いは記号を表示すれば良い。準備できなかつた場合は、参加者全員が鮮やかに視覚化できるように言葉で誘導する。

《小物》

四大を象徴する魔術用具、東 - 剣、南 - 杖、西 - 杯、北 - 塩の皿、等に加え、鈴、キャンドル、香炉や各種魔術武器等を可能な限り準備する。これも代用品を探すことは可能である。

第2章 開式

参加者は別室で法衣を着用する。(状況により平服で行う場合は、なるべく黒または白系統の模様のないシンプルな服装を用意する。長袖、長パンツ、ロングスカート等のなるべく肉体を覆い隠すものが良い。しかし、奇をてらってはいけない。)

法衣の着用が終了したら、沈黙し儀式の背後にある意味を黙想しつつ待つ。

ハイエロファント(Ht)が最初に入場し、室内で小五芒星追儼儀礼(エジプト式文)及び小六芒星追儼儀礼を行う。

次のごとく《竜の十字》を切る。両腕を上げ掌を上に向け、頭は上空を仰いで言う。

「A B R A K A D B R A (アブラ・ハダブラ)」

両腕を降ろし掌を下に向け、背筋を伸ばしたまま、頭を垂れて言う。

「T h L I (テリ)」

頭を正面に向け、左手で右肩に触れて言う。

「V B R C h (ヴェ・バレアク)」

左手をそのまま、右手で左肩に触れて言う。

「V O Q L Q L V N (ヴェ・アカルケロン)」

両手を肩から胸に滑り降ろし、両腕を十字に組み言う。

「O L B L I M H (アル・ベリマー)」

東に行き、地の追儼の五芒星を描き、中心を指し、次を唱える。

「H R V - R A - H A (ヘル・ラ・ハ)」

南に行き、五芒星を描き、中心を指し、次を唱える。

「A P V - P R S h (アポ・フラス)」

西に行き、五芒星を描き、中心を指し、次を唱える。

「A S T h - R N N V T h (アスト・レンヌース)」

北に行き、五芒星を描き、中心を指し、次を唱える。

「A S R - V N - N P R (アサル・ウン・ネフェル)」

東を通過し、中央に戻る。

両腕を広げ、次を言う。

「我が前に、H R V - M A K H I S (ヘル・マクス)

我が後ろに、H R V - A M O V N (ヘル・アモウン)

我が右手に、H R V - M H N T V (ヘル・メントゥ)

我が左手に、H R V - K H O N S V (ヘル・コンスー)」

「A - H - A (アスト・ヘル・アサル)」

「我がうちに、静寂と力の星たる五芒の線が燃え、

柱のなかに、真夜中の太陽たる六芒の光が輝く。」

再び、《竜の十字》を切る。

中央でL V Xのサインを行う。

東に行き土星の追儼のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。

「P A T E R E T M A T E R U N U S D E U S A R A R I T A 」

南に行き土星の追儼のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。

「M A T E R E T F I L I U S U N U S D E U S A R A R I T A 」

西に行き土星の追儼のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。

「F I L I U S E T F I L I A U N U S D E U S A R A R I T A 」

北に行き土星の追儼のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。

「F I L I A E T P A T E R U N U S D E U S A R A R I T A 」

中央に戻り、薔薇十字を描く。

「A R A R I T A A R A R I T A A R A R I T A 」

トライデントのサイン、引き続き両手を王冠に添え、大地に落とす。

「OMINA IN DUOS DUO IN UNUM : UNUS IN NIHIL :
HAEC NEC QUATUOR NEC OMNIA NEC DUO NEC UNUS NEC NIHIL SUNT.」
「GLORIA PATRI ET MATRI ET FILIO ET FILIAE ET SPIRITUI SANCTO EXTERNO ET
SPIRITUI SANCTO INTERNO UT ERAT EST ERIT IN SAECULA SAECULORUM
SEX IN UNO PER NOMEN SEPTEM IN UNO ARARITA.」
L V Xサインを行う。

杖をもつケルックス (K x) と剣または槍をもつセンチネル (S e) は、扉の外側で左右に別れて立っている。Mの鈴の合図の鈴 (銅鑼) で入室を開始する。最初にケルックスが入室して右側に立ち、続いてセンチネルが入室して左側に立つ。他の司官及び参加者は、この二人の間をくぐり、儀典司官 (P t)、ヘゲモン (H g)、ダドウコス (S e)、ハイエレイア (H r)、ストリストリア (S t)、その他の参加者 (東南西北側) の順で入室する。

それぞれは入室する際にセンチネルに剣を突きつけられ、ケルックスの耳にロッジのパスワードを囁かねばならない。ケルックスは正しいパスワードを聞いたなら頷いて、先に行かせる。センチネルは参加者の人数を確認する。

H t : 「ケルックスよ、全ての者が正しいパスワードで応じたか。」

K x : 「全てパスワードを告げし者なり。神殿の首領よ。」

H t : 「センチネルよ、参集すべき者は集まりしか。」

S e : 「呼集されし者すべて集いたり。神殿の首領よ。」

ハイエロファントは、祭壇の西に立ち東を向いて言う。

H t : 「ヘカス ヘカス エステ ベベロイ
I O S . . . の兄弟姉妹たちよ。われらこの場に神殿を開かん。」

P t : 「水と火の浄化」

H t : 「ハイエレイアよ、神殿を水で浄化せよ。」

ハイエレイアは、盃を祭壇のゴブレットに持ち替え、東から始めて、右回りに四方点で外側に面して、指を塩水に浸して十字を切った後、三角形を描く。終了後、自分の場で宣言する。

H r : 「神殿を水で浄化した。」

H t : 「ダドウコスよ、神殿を火で聖別せよ。」

ダドウコスは、杖を祭壇の香炉に持ち替え、東から始めて、右回りに四方点で外側に面して、薫煙の十字を切った後、三角形を描く。終了後、自分の場で宣言する。

D d : 「神殿を火で聖別した。」

P t : 「四門の開放」

ハイエロファントは、両手を目の前で左右に広げる《ヴェールを開く》合図を行う。

ヘゲモンは、東に面し、魔術剣で「風旗」を指し、次を唱える。

H g : 「EX ARP XFA IO AAI TI RIT OL POLIP」
(イクス・アール・ペー イクス・ファー イー・オオー アアー・アアー・イー
ティー リー・テー オオー・レエー ポオー・イー・レー・ペー)

ヘゲモンは、風の召喚の五芒星及び六芒星を描き、次を唱える。

H g : 「見よ、渦巻く風を。内奥にありしものは、慈悲と識見もて外側に開かれん。
われ、風の門を開きたり。」

P t : 「神殿の東に注目されたい。物質の壁のすぐ後ろに、高さ約2メートル、幅約1メートル

の紫色の微光を放つ空間が風の門として開いた。その門の彼方から黄色の光の筋が幾本も差し込み門の中央に黄色い光の球を造る。その輝きがヘゲモン、すなわち空間の君主（貴婦人）を貫き、ヘゲモンの全身は黄色い輝きに包まれる。その様子を心の目で見よ。いまや、風の元素が疾風と化して吹き込んでくる。冷たく激しい風が門をとおり、門の前に刻み込まれた五芒星と六芒星をくぐり抜け、黄色い指を伸ばして門と祭壇をむすびつけ、祭壇に風の霊が凝集する。」

ダドウコスは、南方を向き、杖で「火旗」を指し、次を唱える。

D d : 「 B I T O M I A I A L T I A D P O A D P R M L P R G 」
(ビー・トオー・エム イー・アアー イー・アアー・レー ター
イー・アアー・デー・ペー オー・アアー・デー パール
エム・レー・パール・ゲェー)

ダドウコスは、火の召喚の五芒星及び六芒星を描き、次を唱える。

D d : 「見よ、逆巻く炎を。主の御手にほむらは戯れ、真実を糧に輝く。
われ、火の門を開きたり。」

P t : 「神殿の南に注目されたい。物質の壁のすぐ後ろに、高さ約2メートル、幅約1メートル

の緑色の微光を放つ空間が火の門として開いた。その門の彼方から真紅の光の筋が幾本も差し込み門の中央に赤い光の球を造る。その輝きがダドウコス、すなわち炎の君主（貴婦人）を貫き、ダドウコスの全身は赤い輝きに包まれる。その様子を心の目で見よ。いまや、火の元素が炎の固まりと化して差し込んでくる。強烈な熱波が門をとおり、門の前に刻み込まれた五芒星と六芒星をくぐり抜け、真紅の指を伸ばして門と祭壇を結びつけ、祭壇に火の霊が凝集する。」

ハイエレイアは、西方を向き、杯で「水旗」を指し、次を唱える。

H r : 「 H K O M A K N I L A O I O D I M L D O T A A I T A 」
(ヘイ・コー・マー ケー・ニー・ラー オオー イー・オオー・ディー
エム エル ドオー テェー アアー・アアー・イー タアー)

ハイエレイアは、水の召喚の五芒星及び六芒星を描き、次を唱える。

H r : 「見よ、ざわめく海を。わが真実の名前が漂う、わが内部の血潮よ。
われ、水の門を開きたり。」

P t : 「神殿の西に注目されたい。物質の壁のすぐ後ろに、高さ約2メートル、幅約1メートル

のオレンジ色の微光を放つ空間が水の門として開いた。その門の彼方から青い光の筋が幾本も差し込み門の中央に青い光の球を造る。その輝きがハイエレイア、すなわち綿津見の君主（貴婦人）を貫き、ハイエレイアの全身は青い輝きに包まれる。その様子を心の目で見よ。

いまや、水の元素が大いなる大海のうねりと化して流れ込んでくる。潮が満ちるときのように冷たく清らかな感触が門をとおり、門の前に刻み込まれた五芒星と六芒星をくぐ

り抜け、群青の指を伸ばして門と祭壇を結びつけ、祭壇に水の霊が凝集する。」

ストリストリアは、北方を向き、アंकで「地旗」を指し、次を唱える。

S t : 「 N A N T A A N O A N N O N K P T A K A L A N P L A 」
(エン・アー・エン・ター アー ノー・アー・ネー ノー・エン・ケー・ペー
ター カー・レー アー・ネエー ペー・ラー)

ストリストリアは、地の召喚の五芒星及び六芒星を描き、次を唱える。

S t : 「見よ、不動の大地を。わが思いと情の結び合わさる地よ。
われ、地の門を開きたり。」

P t : 「神殿の北に注目されたい。物質の壁のすぐ後ろに、高さ約2メートル、幅約1メートル

の黄金色の微光を放つ空間が地の門として開いた。その門の彼方から緑色の光の筋が幾本も差し込み門の中央に緑の光の球を造る。その輝きがストリストリア、すなわち大地の君主(貴婦人)を貫き、地の司官の全身は緑の輝きに包まれる。その様子を心の目で見よ。

いまや、地の元素が圧倒的な存在感をもって忍び寄ってくる。大いなる平安と安定の感覚が門をとおり、門の前に刻み込まれた五芒星と六芒星をくぐり抜け、緑の指を伸ばして門と祭壇を結びつけ、祭壇に地の霊が凝集する。」

P t : 「されば祭壇に注目されたい。
東の風の門から、黄色の光が伸び、風を運ぶ。
南の火の門から、赤い光が伸び、火を運ぶ。
西の水の門から、青い光が伸び、水を運ぶ。
北の地の門から、緑の光が伸び、地を運ぶ。
神殿に呼び込まれた四大の霊気は、祭壇を中心に結び合わされ、
巨大な十字架を形成した。」

H t : 「四門は開放された。神秘なる周行を光と闇の小径に起こすべし。」

P t : 「竜の周行。
この神秘なる《竜の周行》により、上空から光の渦が、下方から闇の渦が召喚され、
祭壇を縦軸として、神殿全体を光と闇の二重螺旋のなかに包み込む。」

ヘゲモンが最初に右回りに動き始める。S、W、ストリストリアが追う。

神殿の東を通過するとき《ホルスのサイン》を円周上になし、ヘゲモンは、1回、ダドウコスは、2回、Wとストリストリアは、3回通過した後、自分の場に戻る。

H t : 「神秘なる周行は完成し、天の竜は降下せり。されば《宇宙の主》を讃えん。」

P t : 「宇宙の主の讃歌。
参列者は全て東を向いてお立ち下さい。
ハイエロファントの言葉と動作に合わせ宇宙の主を礼拝します。」

全員が東を向き、主への讃歌を唱える。

A l l : 「聖なるかな汝、宇宙の主よ! (ホルスのサイン)
聖なるかな汝、自然の造らざる者よ! (継続)
聖なるかな汝、広大にして強大なる者よ! (継続)
光と闇の主よ! (ハーポクラテスのサイン)

第3章 冬至の祝祭

H t : 「われら冬至点を祝祭せん。」

P t : 「諸神の召喚」

ハイエロファントは、北に面する。

H t : 「ここに《生まれなき》者を召喚せん」

ハイエロファントは、《竜の十字》を切る。

H t : 「われ汝を召喚す、生まれなき者よ。

汝、地と天を造りし者よ。

汝、昼と夜を造りし者よ。

汝、闇と光を造りし者よ。

汝は、完全者たるわれなり、何人もかって目にせぬ者なり。

汝は、イア ベズ ペー。

汝は、イア アポフラッツ ヨド。

汝は、正と不正を分かちたる。

汝は、女と男を造りたる。

汝は、種と果実を生みたる。

汝は、人を互いに愛しあい、憎みあうべく造りたる。」

H t : 「われは B G D。汝の密儀、すなわち光と闇の魔術を託されし、汝の予言者なり。

汝、湿と乾をあらわし、すべての生命を造り、育み、滅ぼすものなり。

汝、わが声を聞くべし。われは、無垢なる蒼穹の天使なればなり。

こは、汝の預言者につけられし名前なり。」

ヘゲモンは、東を向いて立ち、東の神殿の壁の彼方に聳え立つ巨大なネフティス女神の立像を視覚化する。意識の焦点を女神の目に向け、精神で神のオーラに接触する。

H g : 「わが声を聞け、H R V - R A - H A !

汝、恐るべき不可視の神よ。

汝、霊の虚の場所に住まう者よ。

汝は、人の姿を取りし蛇なり。

汝は、宇宙を調停する者なり。

汝は、神殿の支配者なり。

わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。

されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、

陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、

われに服従せしめん。」

ダドウコスは、南を向いて立ち、南の神殿の壁の彼方に聳え立つ巨大なセト = テュフォーン神の立像を視覚化する。意識の焦点を神の目に向け、精神で神のオーラに接触する。

D d : 「わが声を聞け、A P V - P R S h !

汝、恐るべき不可視の神よ。

汝、霊の虚の場所に住まう者よ。

汝は、否定する霊なり。

汝は、真夜中の天空なり。

汝は、苦き知恵の支配者なり。

わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。
されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、
陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、
われに服従せしめん。」

ハイエレイアは、西を向いて立ち、西の神殿の壁の彼方に聳え立つ巨大なイシス女神の立像を視覚化する。意識の焦点を女神の目に向け、精神で神のオーラに接触する。

H r : 「わが声を聞け、A S T h - R N N V T h !

汝、恐るべき不可視の神よ。
汝、霊の虚の場所に住まう者よ。
汝は、宇宙の母なり。
汝は、全き闇なり。
汝は、魔術の支配者なり。

わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。
されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、
陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、
われに服従せしめん。」

ストリストリアは、北を向いて立ち、北の神殿の壁の彼方に聳え立つ巨大なオシリス神の立像を視覚化する。意識の焦点を神の目に向け、精神で神のオーラに接触する。

S t : 「わが声を聞け、A S R - V N - N P R !

汝、恐るべき不可視の神よ。
汝、霊の虚の場所に住まう者よ。
汝は、死して再び甦りし者なり。
汝は、大地を肥沃にする者なり。
汝は、黄泉の支配者なり。

わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。
されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、
陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、
われに服従せしめん。」

ハイエロファントは、祭壇の南から北に面して両手を広げ祭壇に主神を召喚する。

H t : 「われ、汝を召喚す、生まれなき者よ！

汝、恐るべき不可視の神よ。
汝、霊の虚の場所に住まう者よ。
汝は、S L K - M L - K I、天地の調停者なり。
汝は、B L - M R D K、混沌を打倒する者なり。
汝は、N I N - D A T h R、真夜中の太陽なり。
汝は、生まれなき者にして、宇宙の守護者なり。

わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。
されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、
陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、
われに服従せしめん。」

S t : 「これは神々の主なり。
これは宇宙の主なり。
これは風の恐れる者なり。
これはその命により声を造りし、万物と無の支配者なり。」

H t : 「わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。

されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、われに服従せしめん。」

D d : 「われは汝のもとに行かず、汝がわがもとに来たれり。
星と、夜と、稲妻の彩る空間に、
汝がいずこをさまようとも、常にわがもとに帰り来たり。
われは天の空虚に住まえり。
汝がこの座所を訪れしとき、汝はまさに知る。
炎と煙の柱をとおして、汝は上り、また下りぬ。
不死鳥のごとく、翼は焼かれ、また蘇る。
そは汝の真実の名なり。」

H t : 「われはかれなり、生まれなき者なり。足元に目をもつ者なり。
強大にして不滅の火なり。
われはかれなり、真実なり。
われはかれなり、世界に悪のはびこるを厭う者なり。
われはかれなり、稲妻を発し、雷鳴を轟かす。
われはかれなり、地に生命の雨を降らしたり。
われはかれなり、口より火を発する者なり。
われはかれなり、子を造り、光へと顕現する者なり。
われはかれなり、世界の恩寵なり。
蛇をまといし心臓こそ、わが名前なり。
汝、来たりてわれに従い、すべての霊をわれに服従せしめよ。
されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、われに服従せしめん。イアオ、サバオ。かくのごとき言葉なり。」

P t : 「内なる神殿に《三重に偉大なる神》は降臨せり。
冬至は到来せり、宇宙の主を讃えん」

H g : 「宇宙の主を讃えん。
聖なるかな、汝、風の主よ。
蒼穹を創りしものよ、来たりて冬至を祝せよ。」

D d : 「宇宙の主を讃えん。
聖なるかな、汝、火の主よ。
栄光の座を示すものよ、来たりて冬至を祝せよ。」

H r : 「宇宙の主を讃えん。
聖なるかな、汝、水の主よ。
創造のとき深淵の面を歩きしものよ、来たりて冬至を祝せよ。」

S t : 「宇宙の主を讃えん。
聖なるかな、汝、地の主よ。
自ら座すべき大地を造りしものよ、来たりて冬至を祝せよ。」

H t : 「宇宙の主を讃えん。
聖なるかな、汝、万物を生みしものよ。
森羅万象は、汝のなかにあり、

わが右手を天に伸ばせば、そこに汝あり、（右手を上）
わが左手を冥府に伸ばせば、そこにも汝あり、（左手を下）
わが腕を組めば、そこにも汝あり。（腕を組む）
汝のものは、躍動する《風》なり。（東面）
汝のものは、燃える炎の《火》なり。（南面）
汝のものは、満ち引きする《水》なり。（西面）
汝のものは、堪え忍び定まる《地》なり。（北面）
わが心臓の光輪は回転せり、来たりて冬至を祝せよ。」

H r : 「 I 」 - - - H t : 「 Ipsissimis Isis 」
H g : 「 A 」 - - - H t : 「 Ad Astra Apophem 」
D d : 「 O 」 - - - H t : 「 Omnes Omnium Osiridem 」
S t : 「 I A O (イ イ イ イー ・ ア ア ア アー ・ オ オ オ オー) 」

ハイエロファントは、祭壇から離れ、北に行く。

それぞれの方位の壁に面した E、S、W の三司官は佇立したまま、神殿を囲む魔法円を青白い炎の円環として視角化し、その魔法円に意識と意志を投射して、炎を激しく燃え盛らせ、神殿内部が完全な結界として存在するように強化せよ。（四大の門はそのまま）

ストリストリアは、炎の魔法円の北端に「地の門」を強く視覚化し、そこから冷たく乾いた地のイメージが流れこむ様子を、意識と意志を総動員して誘導せよ。神殿の内部を重厚な地の霊気が徐々に満たしていく有り様を感じなさい。

ハイエロファントは、《木》の絵を交互に左右の手で示す。

H t : 「 見よ！ 神殿の北壁に掲げられし、二つの木を！

その左は、O T z H D O T h T V B V R O すなわち《善と悪の知識の木》なり。
その右は、O T z H C h I I M すなわち《生命の木》なり。
冬至に至るこの瞬間、われらの心臓は《知識の木》に捧げられてあり。
されば、原初の混沌の怒りを見よ。」

P t : 「 人の子の未だ生まれざるとき。神々の夢見る時間の彼方に思いを馳せよ。

神々の大いなる母、古きもののなかで最も古き女神、混沌の大海ティアマトは、その胎を痛めし子どもたちの反乱に際して、未曾有の怒りを発した。
深き綿津見より、悪魔の大軍団が津波のごとく押し寄せ、未だ柔らかな大地は震えた。
形なさぬ宇宙は、戦火に灼かれ、神々の住まいは倒壊した。
太母神の逆鱗に触れ、神々は逃げまどう。ただひとり、シルク＝ムリ＝キを除いて。
無敵の調停者、かの大神ベル＝マルドゥクは、ティアマト女神に挑み、これを破り、その遺体を二つに引き裂いた。
かれは、ティアマトの半分を空に投げ天とし、半分を地とした。
ここに見る《善と悪の知識の木》は、その直後の宇宙を示すものなり。
分割された混沌は、上向きと下向きの枝が示す。すなわち、
天の七つの惑星、星辰の四大を、上向きの七本の枝が示し、
地の七つの惑星、地上の四大を、下向きの七本の枝が示す。
そして、混沌より分離されし赤き竜は、未だ顕現せざる牙を大地のなかに宿したり。」

H t : 「 大地は磐石の重みもちて、汝らの前に広がる。伏せよ、折り伏せ、地に沈め。」

ハイエロファントは、自ら床に伏せる。司官を除く参加者は、同様に床に伏せる。

P t : 「 司官を除く参加者は、床に身を伏せて下さい。あなたの膝から力が失われ、あなたの肉

体は重くなる。手で、足で、胴体で、顔で、大地に触れなさい。目を閉じて、完全に身

体から力を抜いて、大地に身を任せなさい。

あなたの肉体は、大地に沈み、そして無限の安息のなかに溶け込んでいく。あなたの肉体は希薄化し、骨も、肉も、姿も存在しない。目を閉じなさい。そして、闇に身をまかせなさい。

あなたの抱えた心配事も、あなたのなかの喜びも、すべて消えていく。肉体とともに思考も溶けて消える。それが去るにまかせなさい。今やあなたは何ものでもない。あなたは闇のなかの空虚な影である。

さあ、影のものどもよ。この闇のなかに渦がうまれる。目を閉じたまま、心の目でそれを感じなさい。周囲の闇の濃い部分と淡い部分が、幾重にも層をなして、螺旋状に回転し始める。あなたたち、それぞれの前の床に、闇の渦がトンネル状の入り口を開く。闇の渦の彼方、はるかに深い渦の底に、かすかな白い火花が散っている。

渦はあなたの魂を闇の底に引き寄せていく。それは逆らい難い力で、あなたを飲み込んでいく。恐れずに渦のなかを降りていきなさい。ぐらりと身体が傾き、頭を下にして、渦の斜面を滑り降りていく。あなたの周りには、見えない渦が回転し、遥かな深みには、幾つものかすかな光の火花が、遠い雲のなかで輝く稲妻を見るように、あなたの閉じた瞼を通して見える。

やがて、光が強くなり始める。白い火花は、燃える炎となり、煌々と輝き始める。光が強く輝く。あなたは眩しさに顔を背けようとする。背けてはいけない。この光は再生の光だ。闇の底の、そのまた底で、闇は光に生まれ変わる。周り中が明るくなってきた。どんどん明るくなる。そして、暖かくなる。

さあ、あなたは闇のトンネルを抜けた。闇の底の光のプールにあなたは静かに浮かんでいる。全身を浸す、やわらかい光を感じなさい。」

ハイエロファントは、静かに身を起こす。

H t : 「太陽は深き闇の底を通過したり。光は回復し、われらの前にヤコブの梯子が示される。生命の木は、汝らの前にあり。」

P t : 「混沌の女神ティアマトを倒した神々の王ベル＝マルドゥクは、ティアマトの軍団の長、大悪魔キングの胸から運命の板を奪い去った。そして、キングの血管を切り裂き、流れ出る血潮から最初の人間を創造した。心して聞くが良い。われら人間は、大悪魔の断末間の血飛沫のなかから大神ニン＝ダトゥルの手により生み出された。

されば、われら人間の半身を構成するのは闇であり、もう半身を構成するのは光である。

そして、今、われらの前に完成へと至る梯子が示された。」

H t : 「凍てつく大地の奥底に、われらは星の光を見たり。

乾いた樹皮の下に通う樹液の音を聞け。立て、皆の者。背を伸ばし、光を仰げ。」

P t : 「立ち上がりなさい。そして、ゆっくりと目を開きなさい。

あなたの前に《生命の木》の図があります。これこそが天使の上り下る梯子、あなたを失われた楽園へ帰還する希望そのものです。この《生命の木》は、いつか人間が無謬の存在となる日まで、われらの頭上高く掲げられた道標なのです。」

P t : 「冬至点は通過せり。・・・聖餐をともにせん。」

(注：特別な儀式を行う場合は、この部分で行う。繋ぎ方は以下のとおり。
Pの「冬至点は通過せり。・・・をせんがため、・・・の儀式が執り行われる。」
・・・《儀式実施》・・・
Pの「・・・儀式は、終了せり、聖餐をともにせん。」)

ハイエロファントは、祭壇の西に立ち、赤灯に手をかざす。
H t：「ヨド NEQUAQVAM VACVVM」

ハイエロファントは、杯のワインを飲む。
H t：「ヘー LIVERTAS EVANGELII」

ハイエロファントは、薔薇を取り上げ香を嗅ぐ。
H t：「ヴァウ DEI GLORIA INTACTA」

ハイエロファントは、パンに塩をまぶして食う。
H t：「ヘー REGIS JUGUM」

ハイエロファントは、再度、薔薇を取り上げて言う。
H t：「ヘゲモンよ。われ汝を招く。
われとともにこの薔薇の香を《風》の象徴として嗅ぐべし。」

ヘゲモンは、祭壇の東に立ち薔薇の香を嗅ぐ。次にハイエロファントは、Eの手を取り赤灯に手をかざさせる。
H t：「われとともに、この神聖なる《火》の温かさを感じるべし。」

ハイエロファントは、パンを塩にまぶして与え、
H t：「われとともに《地》の象徴として、このパンと塩を食すべし」

ハイエロファントは、盃を取って与え、
H t：「されば最後に、元素の《水》の聖別されし紋章として、
われとともにこの葡萄酒を飲むべし」

ヘゲモンは、退き、ハイエロファントは、祭壇の東に回り、南に面する。ダドウコスが進み出る。以後、同じプロセスでWとストリストリアに四大の象徴たる聖餐を与え、その後に儀典司官は、参列者を進ませる。

全員が聖餐を受け終わったら、Pが進み出て最後に食す。ハイエロファントは、祭壇の東から宣言する。

H t：「われらが食せしものにより、われらに光を分かち与えたまえ。
宇宙の主を讃えん。」

A l l：「聖なるかな、汝、宇宙の主よ！ (ホルスのサイン)
聖なるかな、汝、自然の造らざる者よ！ (継続)
聖なるかな、汝、広大にして強大なる者よ！ (継続)
光と闇の主よ！」 (ハーポクラテスのサイン)

第4章 閉 式

H t : 「 I O S . . . の兄弟姉妹たちよ。神殿を閉じるわれを助けよ 」

P t : 「 水と火の浄化 」

H t : 「 ハイエレイアよ、神殿を水で浄化せよ。 」

ハイエレイアは、開式と同じ動作をする。

H r : 「 神殿を水で浄化した。 」

H t : 「 ダドウコスよ、神殿を火で聖別せよ。 」

ダドウコスは、開式と同じ動作をする。

D d : 「 神殿を火で聖別した。 」

P t : 「 諸神への賛辞。 」

H t : 「 宇宙を領したまう《三重に偉大なる神》に感謝せん。

B L - M R D K、混沌の破壊者よ、時空の彼方に戻りたまえ。 」

S t : 「 黄泉を領したまう《死して再び蘇る神》に感謝せん。

大地の領主、A S R - V N - N P Rよ、霊の虚の場所に戻りたまえ。 」

H r : 「 魔術を制したまう《黒き女神》に感謝せん。

海の貴夫人、A S T h - R N N V T hよ、霊の虚の場所に戻りたまえ。 」

D d : 「 苦き知恵を制したまう《灼熱の試練を下す神》に感謝せん。

虚空の領主、A P V - P R S hよ、霊の虚の場所に戻りたまえ。 」

H g : 「 神殿を領したまう《白き女神》に感謝せん。

涼風の貴夫人、H R V - R A - H Aよ、霊の虚の場所に戻りたまえ。 」

H t : 「 神秘なる逆周行を光と闇の小径に起こすべし。 」

P t : 「 竜の逆周行。

この神秘なる《竜の逆周行》により、祭壇を軸として上下に絡み合った光と闇の二重螺旋が分離し、光の渦は上方に、闇の渦は下方に去って行く。 」

ヘゲモンが最初に左回りに動き始める。N、W、ダドウコスが追う。

神殿の東を通過するとき《ホルスのサイン》を円周上になし、ヘゲモンは、1回、ストリソトリアは、2回、Wとダドウコスは、3回通過した後、自分の場に戻る。

H t : 「 神秘なる逆周行は完成し、天の竜は上昇せり。されば《宇宙の主》を讃えん。 」

P t : 「 宇宙の主の讃歌 」

全員が東を向き、主への讃歌を唱える。

All : 「 聖なるかな汝、宇宙の主よ !

(ホルスのサイン)

聖なるかな汝、自然の造らざる者よ！ (継続)
聖なるかな汝、広大にして強大なる者よ！ (継続)
光と闇の主よ！」 (ハーポクラテスのサイン)

P t : 「四門の閉鎖」

P t : 「神殿の北に注目されたい。ストリストリアがエノク語の呪文を唱えると同時に、祭壇から地の

門に向かい平安と安定の感覚が押し戻されていく。黄金色の門の彼方、地の霊が本来所属すべき世界に、緑色の光の筋が幾本も矢のように吸い込まれていくだろう。かれが追儼の五芒星と六芒星を描ききった瞬間に、地の門は上下左右から一瞬に折り畳まれるようにして、消滅する。

これら全てを心で見よ。」

ストリストリアは、北方を向き、アंकで「地旗」を指し、次を唱える。

S t : 「NANTA A NOAN NONKP TA KAL AN PLA」
(エン・アー・エン・ター アー ノー・アー・ネー ノー・エン・ケー・ペー
ター カー・レー アー・ネー ペー・ラー)

ストリストリアは、、地の追儼の五芒星及び六芒星を描き、次を唱える。

S t : 「見よ、不動の大地を。わが思いと情の結び合わさる地よ。
われは、地の門を閉じた。」

P t : 「神殿の西に注目されたい。ハイエレイアがエノク語の呪文を唱えると同時に、祭壇から水の

門に向かい急速に潮が引き始める。オレンジ色の門の彼方、水の霊が本来所属すべき世界に、青い光の筋が幾本も矢のように吸い込まれていくだろう。かれが追儼の五芒星と六芒星を描ききった瞬間に、水の門は上下左右から一瞬に折り畳まれるようにして、消滅する。

これら全てを心で見よ。」

ハイエレイアは、西方を向き、杯で「水旗」を指し、次を唱える。

H r : 「HKOMA KNILA O IODI M L DO T AAI TA」
(ハイ・コー・マー ケー・ニー・ラー オオー イイー・オオー・ディー
エム エル ドオー テー アアー・アアー・イイー タアー)

ハイエレイアは、水の追儼の五芒星及び六芒星を描き、次を唱える。

H r : 「見よ、ざわめく海を。わが真実の名前が漂う、わが内部の血潮よ。
われは、水の門を閉じた。」

P t : 「神殿の南に注目されたい。ダドウコスがエノク語の呪文を唱えると同時に、祭壇から火の

門に向かい熱と光が反射される。緑色の門の彼方、火の霊が本来所属すべき世界に、赤い光の筋が幾本も矢のように吸い込まれていくだろう。かれが追儼の五芒星と六芒星を描ききった瞬間に、火の門は上下左右から一瞬に折り畳まれるようにして、消滅する。
これら全てを心で見よ。」

ダドウコスは、南方を向き、杖で「火旗」を指し、次を唱える。

D d : 「BITOM IA IAL T IADP OAD PR MLPRG」
(ビー・トオー・エエム イイー・アアー イイー・アアー・レー ター

イー・アァー・デー・ペー オー・アァー・デー パァール
エム・レー・パール・ゲー)

ダドウコスは、火の追讎の五芒星及び六芒星を描き、次を唱える。

D d : 「見よ、逆巻く炎を。主の御手にほむらは戯れ、真実を糧に輝く。
われは、火の門を閉じた。」

P t : 「神殿の東に注目されたい。ヘゲモンがエノク語の呪文を唱えると同時に、祭壇から風の

門に向かい激しい風が吹き戻す。紫色の門の彼方、風の霊が本来所属すべき世界に、黄色い光の筋が幾本も矢のように吸い込まれていこう。かれが追讎の五芒星と六芒星を描ききった瞬間に、風の門は上下左右から一瞬に折り畳まれるようにして、消滅する。これら全てを心の目で見よ。」

ヘゲモンは、東に面し、短剣で「風旗」を指し、次を唱える。

H g : 「EXARP XFA IO AAI TI RIT OL POLIP」
(イクス・アール・ペー イクス・ファー イー・オォー アァー・アァー・イー
ティー リー・テー オォー・レー ポォー・イー・レー・ペー)

ヘゲモンは、風の追讎の五芒星及び六芒星を描き、次を唱える。

H g : 「見よ、渦巻く風を。内奥にありしものは、慈悲と識見もて外側に開かれん。
われは、風の門を閉じた。」

ハイエロファントは、両手を目の前で左右から合わせる《ヴェールを閉じる》合図を行う。

H t : 「四門は閉鎖せり。
IHShVHとIHVShHの御名において、
この儀式に捕らわれしすべての霊を解放せん。」

H t : 「神殿作業は終了せり。神殿は閉場した」

P t : 「参加者退出」

参加者はヘゲモンを先頭に左回りに退出する。Pが最後尾につく。Mを残して全て退出した後、ハイエロファントは、小五芒星及び小六芒星の追讎儀式を行い神殿の魔術的磁気作用を中立化する。

その後も星幽的影響力が残存するのを認めた場合は所要の大儀礼で追讎する。

VERBORUM PUBLICA
I O S
RITUALE DE BRUMA

IMPRIMI POTEST: I O S
NIHIL OBSTAT QUOMINUS IMPRIMATUR
IMPRIMATUR : M.E.S.A. 5=6
NOVEMBRIS MCMXCIV

冬至儀式

C I O S 1994
1994年11月20日 I O S 発行

本文書は、複数のまたは個人の会員が、魔術実践の練習のために使用するものであり、I O S の公式儀式手順書ではない。従って、本儀式を公に実施するテンプル、ロッジはその旨を会員に明確に告示する必要がある。しかし、それは同時に本文書を利用した会員の自由な実践活動を妨げるものではない。会員外の使用については、I O S の許可が必要である。本文書の著作権は団に所属する。本文書の内容の一部または全部を、団の文書による許可なく、機械的、電子的、光学的、霊的、その他の手段で複製、引用、転写することを禁じる。